

「キリストのみを誇る」

ガラテヤの信徒への手紙 1 章 1 - 10 節

森島 牧人 牧師

先回は、今日と同じ、ガラテヤの信徒に宛てたパウロの手紙を読んで、「平和」について考えました。今日からは、この手紙を学びながら、その御言葉の中に生きて行きたいと思えます。

このガラテヤの信徒への手紙を読んで行きますと、キリストの使者・使徒で、特に異邦人伝道に力を尽くしたパウロの意気込みがひしひしと伝わって来ます。イエス・キリストの福音のためにのみに戦ったパウロが、最も重要なこととして伝えたのは＜福音＞でした。しかし、この手紙では、その福音が歪められようとしていることを問題としています。それは、パウロの言うキリストの福音だけでは不十分で、それに＜律法＞や＜割礼＞を加えなければならないと説く伝道者たちが、ガラテヤ地方(今のトルコ中心辺り)の諸教会に現れたということでした。この状況は初期の教会にとって危機的と言えるものでした。さらに重要な問題点は、その伝道者たちが、パウロの伝えた福音を福音とした上でそのことを説いていることでした。パウロは、自分の伝えた＜キリストの福音のみ＞を明確にし、さらにそれを徹底する必要があると考えたのです。

そのためにパウロは＜キリスト信仰の核心＞を語らなければなりません。ガラテヤ 6 : 14 に「このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。」との言葉がありますが、キリストの十字架以外のものを決して誇ってはならないと説くパウロの信仰の核心は、＜「福音」(Good news) は十字架に架けられた「キリスト御自身である」＞というものでした。世々の教会や信徒はこの信仰の核心を語ったパウロの手紙を彼らが危機に直面する度に読み返し、どうすれば良いかの答えを、この中に見つけて行ったのです。宗教改革で知られるマルティン・ルターもまた、神の義、神がどういうお方であるかを、この手紙の中に発見したと言っています。

キリストのことを見たことも聞いたこともない異邦人に対して成されたパウロの伝道には三度の伝道旅行が含まれますが、この手紙はその三度目の旅先で書かれたとされるもので、他のパウロの手紙とは異なっていると言われています。それは、挨拶文に続いて直ぐ、「キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはくあきれ果てています。」(ガラテヤ 1 : 6) と、大上段に切り込んでいることです。この書き方によってこのパウロが信仰の根本に関わる重要なことを言おうとしていることが分かります。

さて、パウロにあきれ果てると言われたガラテヤの信徒、かつてパウロの伝道を受け入れたはずの人々の前に、エルサレムから来たユダヤ教の色彩を強く持ったユダヤ人キリスト者の伝道者たちが現れたのです。彼らは人々に向かって、福音を信じるためには同時に律法を遵守し、割礼を受けなければならないと主張したのです。その主張に惑わされてそれに従って行こうとする信徒が出始めていたのです。許し難いことは、その伝道者たちがキリストの福音を伝えながらそれを覆し、他の福音へと導こうとしていることでした。パウロは「たとえわたしたち自身であれ、天使であれ、わたしたちがあなたがたに告げ知らせたものに反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。」(同 1 : 8) と激しい言葉を繰り返して彼らを非難しています。この「呪われるがよい」は最後の審判に関わられる時の＜神の言葉＞で、これを使って語るパウロには、キリストの福音には何もプラス・マイナスもせず、キリスト御自身のみが福音、最終的・究極的なものであるとする、つまり最後の審判に於いて、私たちが神の審判の言葉に耐えうる唯一の決定的な福音・救いの根拠は、これ以外にはないという強い思いがあったのです。

パウロは、＜福音(Good news)＞は十字架に架けられたキリスト御自身であるという＜キリスト信仰の核心＞を伝える伝道者として立ち、それを語って行くことに命を懸けた指導者でした。このパウロの、キリスト御自身が福音であり、それに何かを加えたり引いたりしてはならないという信仰の核心を、今を生きる私たちもしっかりと理解し心に留め置かなければなりません。

私たちには今まで自分が社会の中で積み上げて来た努力や行為などの成果を福音にプラスして支えとし、安心したいという思いが多かれ少なかれあります。しかしパウロは「それはキリストの福音を否定し、ありもしない福音を言っていることになる」と語っているのです。

(説教要約 羽入田悦子)